

# 一葉日記から読む『闇桜』

— 言語行為としての語りを中心に —

笹川洋子

Reading Yamizakura from a view of Ichijo's Diary  
— Narrative as Speech Act

Yoko Sasagawa

## 要旨

『闇桜』は一葉の処女作と言われている。本稿では、『闇桜』の執筆に沿って記された一葉日記の語りを言語行為として読み取りながら、『闇桜』執筆の背景を考える。『闇桜』をめぐる議論のうち、(一) 起草の時期、(二) 創作に対する一葉の覚悟、(三) 師桃水への一葉の思いを取り上げ、一葉日記の語りから『闇桜』執筆に映された一葉の生活世界を探る。

キーワード：闇桜、一葉日記、言語行為、語り

## 一 はじめに

一葉がジェンダーの視点を持ち、「花ごもり」「たけくらべ」に「ごりえ」「われから」の中で伝統的な女性像に捕われない新しい女たちを描いていったことは、先行研究で指摘されている。一葉は「花ごもり」以前にも作品を発表しているが、代表作が書かれた《奇跡の十

四ヶ月》の陰に隠れ、初期作品群については研究が十分に進んでいないのが現状である。本稿では、処女作「闇桜」をめぐる日記の記述を言語行為として読み、創作の背景や一葉が創作にどのような思いを込めたかを探ってゆく。

「闇桜」は忍ぶ恋のために生を終える十六才の少女、中村千代の物語である。古典作品では物語の背景となる季節と物語のストーリーを重ね合わせて書くという手法がたびたび取られ、山田有策(一九九四)

は「和歌的王朝物語発想が色濃い」（山田有策、前掲書）と評している。物語の随所に古典作品のメタファーが組み込まれているが、物語の題名に関しては「闇桜」という咲き誇る花の象徴に反するように千代は咲かないままに、萎れていき、儂く散る。そして、物語には幼馴染で、兄妹のように仲が良い、隣家の良之助が登場する。良之助は十二才の学生である。二月の半ば、摩利支天の縁日で良之助と連れ立って歩く千代は突然背をたたかれる。「おむつまじいこと」と一言、笑って去る束髪の一群体は学友たちだった。千代はその日から良之介への萌える思いを意識するようになる。しかし、良之助の心は淡白で、それを思う千代はどんどん弱ってゆく。瀕死の千代を見舞った良之介は、奉公人のお福から熱がある時はたえず良之助の名を呼ぶ、病が元はあな様と言われ、なぜもっと早くそれを言わなかったのか、そうすればこんな状態にはしなかったものをと悔やむが、千代は早く帰るよう促す。「お詫は明日」と言葉を残し、千代の命は燃え尽きる。物語は「風もなき軒端の櫻ほろ／＼とこぼれて夕やみの空鐘の音かなし」と結ばれる。

先行研究における「闇桜」をめぐる論として、(一) 起草の時期、(二) 「片恋」という主題に一葉の和歌を重ね、桃水への思いという「真情」を重ねたとする論（愛知峰子、二〇〇三、野口碩、一九九六他）、(三) 作品中の語彙をメタファーとして解説する論（橋本のぞみ、二〇一一）(四) 千代の心理描写に近代性を見る論（関礼子、一九九七）、(五) 千代の良之助への「片恋」に関して長子相続という社会背景から解釈を加える論（野口碩、前掲書）、(六) 桃水の添削の有無を問う論議（塩田良平、一九五二、関良一、一九七〇、橋本威、一九六七、野口碩、一九九六他）、(七) 『伊勢物語』第三段「筒井筒」をはじめとする古典や同時代の作品の影響に言及する論（山根賢吉、一九六八、塚本章子、一九九九、屋宜瑞穂、二〇〇〇他）などがあげられる。

先行研究の論議との関連から本稿の扱う範囲を記すと、まず(一) 「起草の時期」について簡単に触れ、次に(二) 一葉がこの作品に込めた真情について、一葉日記を資料とし、「闇桜」執筆の背景から探っていく。(三) メタファー、(四) 描写の方法、(五) 社会背景の影響についての考察は別稿に譲り、(六) 添削の有無、(七) の古典との関連については、本研究の範囲外に置く。

次節では、一葉日記の記述を辿りながら「闇桜」起草の背景を紹介する。

## 二 「闇桜」執筆の背景

### 二・一 「闇桜」起草まで

一葉が半井桃水に師事するようになったのは、明治二十四年四月十五日、一葉二十歳、桃水三十二歳であったが、「闇桜」はその一年後に書かれ、桃水の尽力により明治二十五年三月『武蔵野』に掲載されている。明治二十四年四月二十八日に朝日新聞大阪本社系の人々によって創刊された小説雑誌『なにはがた』に対して、朝日新聞東京支社の同人たちが考えたのがこの『武蔵野』の発行であった。桃水は『なにはがた』では山田淳子が紅一点として注目されたことから、一葉に毎号執筆させることで、彼女の存在を世に印象づけようとしたと言われている。

『武蔵野』は三号で廃刊になるが、一葉は一号に「闇桜」、二号に「たま櫛」、三号に「五月雨」と毎号作品を発表していく。桃水は一葉の才能を見抜き、一葉のために各所に働きかけ、文芸雑誌の創刊までこぎつけたのであった。（野口碩、一九九六、参照）

処女作とされる「闇桜」の前に、一葉は少なくとも三篇の作品を完成させていたが、一葉の名で活字化されたのはこの「闇桜」が最初であった（野口碩、前掲書）。明治二十四年の一葉日記からその執筆の

経緯を探ることができる。一葉が桃水に出会ったのが、四月十五日。桃水と出会った一ヶ月半後に、一葉は原稿を見せに桃水の元を訪れる。それが、野口碩（前掲書）の指摘にある「闇桜」以前の三作品である。まず、「廿四日までに草稿名余なくしたためぬ。明日は小石川の稽古日也。其夜は中々にあわただしかりき。其夜郵便して草稿は半井うしに送り参らせぬ」（「若葉かげ」明治二十四年四月二十四日）にある「草稿」は「作品（a）」と考えられる。また、五月二十七日の日記に「作品（b）」が記されている。「前約の小説稿成しをもて、桃水ぬしにおもむく。今日は、我れ例刻より遅かりしをもて、君既におはしき。種々我が為よかれのものがたりども、聞えしらせ給ふ」（「若葉かげ」明治二十四年五月二十七日）。そして、「作品（c）」は同年十月三十日の日記に見ることが出来る。「半井君をとふ（略）小説二付てしばし物語りして先に送り置たるなん此頃変名にて世に出さばやなどの給ふ（蓬生日記一、明治二十四年十月三十日）」。

「闇桜」の脱稿は、明治二十五年二月十四日であるが、それまでの一葉日記を辿ると創作に対する一葉の思いが浮かび上がってくる。なお、「闇桜」執筆の過程で、桃水が一葉の原稿にどの程度朱を入れたかについては、塩田良平、橋本威等が下書きと思われる原稿と清書されたものを比べ、詳細に検討しているが、ここではこの論議には立ち入らず、「闇桜」脱稿までの日記の記述を確認することで起草の時期やこの作品に込めた一葉の思いを探っていきたい。

桃水に紹介された一週間後の明治二十四年四月二十二日、一葉は早速原稿（作品（a））を携え、桃水を訪ねる。

「例の午後より半井ぬしをとふ。種々のもの語りとも聞えしらせ給ひて先の日の小説の一回新聞にのせんには少し長文なるか上に餘り好文めかしき所多かり。今少し俗調にと教え給ふ・昨夜かきたる丈の小説の添削給へとて差置たるまま今日は早う帰らぬ・」（「若葉かげ」この時、一葉は桃水から「少し俗調に」と教えを受ける。「一葉が持

参した一回分の小説を見て、桃水は妹の幸に『何分和文でいで、あれではとても新聞小説には載せられない』ともらしたと言う（塩田良平宛幸子書簡）。桃水は『東京朝日新聞』の主筆小宮山桂介などに引合わせて発表の便宜をはかろうとしたが、当面賣物にすることが難しいと見て六月十七日にかなり立入った助言を與えたようである。その言葉が一葉にとって苦いものであったことは、その日の日記の思いつめた文章でわかる」（筑摩書房「若葉かげ」補注、三七頁）。

四月二十二日からほぼ二か月後の明治二十四年六月十七日の日記を見よう。一葉の真摯な思いが記されている。桃水からの手紙により師の居宅を訪れたが、桃水は帰って来ない。妹の幸子と話しているうちに桃水は戻ってくる。「もの語りどもいと多かり、小宮山ぬしの深き御慮り例のうしの情深きなどかたじけなしともかたじけなし、されど筆にまかしてかいるさんもかつは我身づからのやましきことありよく為し得べき事かあらぬか今しも思ひわきがたければこはおのづから有々のちに昔し語にもならはいとうれしけれと今はもらしつ」（「若葉かげ」）。桃水の親切をありがたく感じながらも、ただ筆に任せて書いている自分に「やましいことがある」と一葉は記す。上手くできるかどうか、今は思いが湧いてこないが、これがごく自然なことになり、後に昔語りにもなればとても嬉しいが、今はそう言葉を漏らすにとどめよう。

一葉はその日は道を変えて、おそらくは遠回りをして、湊端を通って帰る。柳を見ると、人もこのように世の風に従えというように疎ましいが、松は高く深い操のしるべのように覚えて、沈んだ心も引き起こされるようだと言記す。柳と松は、雅文すぎる一葉の文章を俗調にという桃水の指摘に対する一葉の自負を象徴しているようである。しかし、一葉は続けて、自分の身をなきものにしたいとさえ思うが、親たちのことを思い、自分一つの身ではないと思ひ返し、歩くともなく九段の坂上に着いたとただらなぬ思いを記す。「秋の夕暮ならねと思ふ

ことある身にはミる物聞物はらわたを断ぬはなくともすれば身をさへあらぬさまにもなさまほしけれど親はらからなどの上を思ひ初れば我身一ツにてはあらざりけりと思ひもかへしつべし、あゆむともなしにいつか九段の坂上には成ぬ」

塩田良平（一九五二）はこの日記について、こう書き添えている。「憶測にすぎぬか、あの濠端をうつむいて歸つた夕には、恐らく桃水からもつと當世むきの作品をまとめることをすすめられたのであらう。それに對してさういふ自信がなかつたのであらう。そして桃水等の親切が身にしみればしみる程、それが自分の才能ゆゑの親切か、女なるが故の親切か、萩の舎だけの教養で、さういふ才能に自信を失つた彼女の煩悶が『身をさへあらぬさまにもなさまほしけれ』といふ感傷に陥らせたのであらう、といふことが考へられる」（塩田良平、一九五二、二九八頁）。

そして六月十七日以降、十月まで桃水を訪れたことは日記に記されていない。「この事情は明かではないが、桃水から言われたことを行い得ないまま、この期間彼女は、小説修行よりも歌子の紹介を心待ちにして圖書館に通つた。三枝など知人の援助を受けながら、内職で繋ぐ逼迫した生活の中で、無為に過ぎて行く時間に彼女は苦惱し、自分の弱さが家庭の不安の原因なのだと考えている。（塩田良平、前掲書、七八頁）」

明治二十四年十月七日の日記（蓬生日記）を見ると、一葉が創作に苦慮している様子が窺える。一葉は師（中島歌子か桃水）に見せようと文机に向かうが、納得できないものばかりで、原稿を引き裂いて捨てたのは十回に及ぶ。未だに一篇の作品も綴れないとは情けない。早くものにして師に一回だけ添削を頼んでいるのに、うまく書けず引き裂いている。それでは、別の趣向でと書き出すが、どれもひどく拙い。古今の有名な物語や小説を見る度に、自分の才の貧しさに悲しくなり、全てを打ち捨てたいが、思いを込めてきたものを捨てることは

できない、をこがましいとは思ふが、また綴り出している。明後日までは必ず書き上げよう。これができないなら、死のうと思ふが、心が小さいと笑う人は笑ってほしい。一葉の創作への覚悟が描かれる。

「快晴。午前髪すましぬ。午後より文机に打むかひて文ともそこはかとかいつくくるに心ゆかぬことのみ多くて引きき捨くすることはや十度にも成ぬ。いまだに一篇の文をもつづり出ぬぞいとあやしき。早うものし初たるなむ師の君に一回丈添削を乞いたるあり、そがつづきをつづらばやと思ふに我ながらおもしろからでかう引やりつるなれとさてしはつべきならねば別に趣向をもうけなどして又つづり出るに夫もこれもいとつたなし、昔し今の名高き物語も小説もミる度に我筆我ながらかなしう成てはてくは打も捨まほしけれど中々に思ひ初つることえやみまじき心が心をこがましけれど又つづり出ぬ。あさて迫にはかならず作りはてん。これ作りはてねば死なんとおもふも心ちいさしと笑う人はわらひねかし。」

なお、橋本威（一九八六）は、桃水の添削原稿が発見されていないことから、一葉の原稿に朱を入れたのは歌子であるとしているが、本稿では塩田良平（一九六八）の論を踏襲し、桃水の添削があったと考へる。

十月十八日、野々宮菊子が来て、「一昨日より半井君のもとに遊びてよべ歸りぬ。夏子ぬしはいかゝし給ひしやなといいたう打案しての給へりし」と告げる。伺おうと思ひながら、さしさわる事があり、伺えないのをいつも心苦しう思っていたと一葉は記す。

十月二十二日、一葉は桃水に、明日お伺いしたいと文を出す。約束の文章は全くできていない。夜、桃水から返事が来る。二十七日は妹の孝子を嫁に出すので、それが済んでから来るようにと言う。一葉は、あまりに急なことで本当のことだろうかと言ふ。

十月二十四日、「久しう訪ひ奉らざりしうちに様々あやしき物がた  
りども多かゝること半井君のそをおのれにつゝまんとて苦勞し給ふな  
ど聞にも少しほゝゑまれぬ」。一葉は鶴田民子が桃水の子を産んだと  
いう噂を耳にしている。

十月二十五日 一葉は八時に家を出る。桃水宅には兄弟や知人がお  
り、一葉は玄関で祝辞だけ述べて辞す。十月二十八日に大きな地震が  
ある。作文にかかゝるとある。十月二十九日、桃水より明日参らんと  
葉書が来る。書きかけていた文を書き直す。十月三十日、風がやまず、  
曇り空の寒い一日である。地震にあった知人が気がかりだが、一葉は  
十二時頃家を出て、桃水宅を訪ねる。長火桶一つを隔てて、桃水と対  
峙した一葉は緊張して冷や汗が流れるような思いでハンカチをまさぐ  
る。桃水は妹を嫁に出した苦勞や、弟と鶴田民子の関係など話す。そ  
のことで醜聞が起るとは思いも寄らなかつたが、咎は自分にある。  
自分はあなたに書をなすような男ではないが、母君は案じて引き止め  
られただろ。桃水は長らく訪ねなかつた一葉に釈明をし、小説につ  
いて話す。先の送った作品を変名で出そうかという。恥ずかしいがと  
日記には書きながら、一葉は受諾する。小説を四、五冊借りて立つ。  
もう少し話そうと桃水が引き止めるが、一葉はそれを辞して帰途に着  
く。桃水の醜聞については、自分はそう思っていないが、わざわざ説  
明するところがをかしいと皮肉っぽく書き添え、塩田良一は一葉が鶴  
田民子の子を桃水の子だと生涯信じていたと記している(塩田良平、  
一九六八、三一〇—三一七頁)。野口碩は、この時の原稿を「作品  
(c)」と名付ける。

## 二・二 「闇桜」起草の時期

「闇桜」の脱稿は、日記の記述により明治二十五年二月十四日であ  
ることがわかっているが、実際の「闇桜」起草の時期については大き  
く分けて三つの案が示されている。(一)筑摩書房版の注釈の一月十

三日以前という説、(二)関良一の一月十三日、橋本威の一月二十七  
日という説、(三)一葉日記「雪の日」に原稿を依頼されたとある二  
月四日とする説(塩田良平、一九五二、菅聡子、二〇〇一)である。  
この論議を念頭に置き、明治二十四年十一月から明治二十五年一月十  
三日の一葉日記における創作の記述に注意してみよう。十一月十日に  
雑事をそれ所ではないと放り出し、初めて「小説の著述」という語を  
用い、執筆に掛かっている。十一月二十四日に一葉はやっと桃水に会  
える。

十一月五日、女坂下に筆を買いに行ったり、洗張りを頼んだり朝  
から雑事で忙しい一葉だが「今日も一日することなしに終る」と書く。  
十一月六日「机邊ニは有ながら思ふ事何もならず、我身耻かしき仕業  
也」。十一月八日、一葉は図書館に行く。開館の九時に入館し、本を  
三冊借りる。東鑑は読まず、太平記、今昔物語を読む。図書館を出た  
のは日が傾く頃であった。十一月十日、一葉は十五日の追善會に招か  
れ、着るものを縫わなくてはいけないが、「それ所かほとと小説の著  
述に従事す。十四日に編はてんとて成りと書いてゐる。十一月二十二  
日「書を半井君によす。明日在宅の有無をとふ成けり。此夜した、め  
ものいと多くて三時過る頃まで執筆す」十一月二十三日、桃水より文  
が来る。午後から行きかたかつたが、空が俄かに暗くなり、母の具合も  
悪い。

十一月二十四日 前日に約束を違えた一葉は、朝九時に家を出て、  
十一時頃桃水の隠れ家に着く。やがて、どてらを羽織った桃水が起き  
てくる。下女は帰り、人のいない室内で二人は差し向かいになる。こ  
の姿を見たら、学友や親戚に何と言われようか思いながら、一葉は  
「骨子は片戀といふことにて侍りとて其筋だてなどかたる。そはいと  
よかるべうこそ、其くだりはかくせばよからん、ここはかくせばな  
との給ふ」桃水は、一葉の趣向を褒め、自分の恋愛観を披露する。自  
分ほどその女を愛する人はいないし、自分ほど幸福な生涯を送った者

はいない、そう思えることこそ、誠の愛だと。桃水は本宅から昼食を取り寄せ、一葉は辞しかねて、透水と昼食をとる。緊張する一葉に、桃水は、自分は粗野な男だが恐れるにはあたらないう。一葉は、古い友人たちは知っているが、このように堅くなる性分なのだと思える。桃水は少し笑って、それならなおさらのこと、自分を友と隔てないもの思っている。一葉は、前からずっと桃水のことを師とも兄君とも思っていると言う。桃水は黙る。しばらくして、桃水の口から漏れたのは、次のような言葉だった。「ああ、私のように不幸な者はいない……」。以下の日記は十二月二十一日の前半部まで散失している。

この時、一葉が桃水に語ってみせた骨子について、筑摩書房版一葉日記校注では『闇桜』に先行する構案と思われる」としている。このように「骨子は片戀といふことにて待りとて其筋だてなどかたる」という日記の文に添い、一葉が小説の構想について口頭で桃水に語って聞かせたという解釈が一般的である。しかし、十一月二十四日に桃水に会う前に、十一月十日、二十二日と一葉は原稿を書いており、桃水の助言も「ここはこうすればよからう、ここはこのように書いたらどうだろうか」とかなり具体的である。具体的な細部に渡った助言は、口頭で大まかな筋を聞いたというより、実際の原稿を前にし、与えられた助言と考えた方が自然であろう。また、日記の記述を辿ると、一葉にとつての「師に助言を求める」という言語行為は、草稿も持たず話に行くというような気軽なものではないことがわかる。十月七日の日記には懸命に原稿を書きながら「早うものし初たるなむ師の君に一回文添削を乞いたるあり」とあり、助言を求める行為に対する一葉の必死さが伝わってくる。筑摩書房版の注釈では「闇桜」起草は明治二十五年一月十三日以前とされているが、「助言」という言語行為に注目すると、この日、一葉は「闇桜」の草稿を携えて、桃水宅を訪ねたということも考えられる。そうすると「闇桜」起草を、筑摩書房版に

あるように、明治二十四年十一月十日頃とすることも可能であろう。十二月二十一日、それ以前の日記は散失したが、後半の日記は「せんとして書状を出したるよし」と桃水の元を訪ねた断片から始まる。十二月十九日附桃水宛書簡によれば、一葉は数日前、桃水の許を訪ねて計画中の趣向などについて話合った折に、生活の窮状を打明けたらしい。桃水はその場で援助を承諾し、改めて書簡で「御約束のものは」と申し出る。これは一葉の二十五日の日記の記事に照應する。（略）冒頭の断片は、その依頼に應じて再度透水宅に赴いた日の記録であるという。二十五日「今日は半井うし約束の金持参し給ふべき約なれば其事となく心つかいす。庭前の梅一輪と一葉は記す。この日、約束の金は届かなかつた（塩田良平、一九六八、三二二—三二五頁）。

明治二十五年一月八日。朝から知人の家々を訪ね、漸く平河町の桃水の本宅に着くと、家に「貸家」と張り紙があり、一葉は胸をどきりとさせる。近づいて見れば、半井氏お尋ねの方は何処其処へと書いてある。本宅に行ってみると、下女は桃水は旅行中であると答える。一葉は隠れ家に行くと、火鉢に湯のたぎる音などするが、格子戸は人が入れなくしてある。人のいる気配はなく、一葉は台所に土産の小箱を差し置いて家を出る。歸る道すがら、はしたないことをしたと身を攻めて、一葉の心は苦しい。家に帰っても何もする気が起こらない。なぜ桃水は住処を変えたのだろうかと苛立ちながら何度も文を書き直し、読み返してみるが、封をしないまま他の事をする。

十一日、桃水から葉書が来る。隠れ家にいると言う。さても、先日の手紙を書きそこね、出さないで良かったと我ながら嬉しく思う。

十二日 桃水の葉書で安心したのでろうか。一葉は「此夜より又小説著作にかゝる。ことの外なまけたり」と記す。関良一、橋本威はこの「小説」を「闇桜」と解釈する。関良一は「闇桜」の起草を日記の記述にある通り「一月十二日に起稿」としている。そして、翌一月十三日の日記を見ると、一葉が上野図書館へ行ったことが記されている。

「十三日晴天。図書館へ行く。九時頃より家をば出づ。『太平記』『大和物語』をかりる。但し『大和ものがたり』はみずして『太平記』のみ閲覧す」(二)につ記「明治二十五年一月十三日」。橋本威(一九六七)は、これを図書館に小説の材料を探し行つたと解釈し、実際の起草を「二月二十七日」としている。なお、筑摩書房版「につ記一」の注釈52(九一頁)では「又小説執筆かゝる」の「又」という語彙から「しばらく中断していた『闇桜』の制作と思われる」、明治二十四年十一月二十四日の日記参照としている。前述したように、同日の日記に「葉は桃水に「骨子は片恋といふことにて待りとて其筋だてなどかたる」とある。本稿では、一葉日記に添い、原稿執筆の経過を見てきたが、十一月二十四日の時点で既に「闇桜」の執筆にかかっていたと考える。

## 二・三 「闇桜」脱稿

明治二十五年一月十三日以降の一葉日記に戻ろう。一月十四日、午後より作文にかかると。一月十五日午後より作文、十七日「早稲田文學通讀」夜更しをして一葉はひどい風邪をひく、二十三日「新小説かりる、歸來閲覧に一夜を更す」二十七日「午前より小説稿にかゝる。この夜なす事なしにふしたり」二十八日「終日小説従事」二月三日、一葉は桃水に葉書を出す。間もなくして、桃水からも来る。どうやら自分より先に出されたようだ。「かく适も心合ふことのあやしさと一笑す」と一葉は書く。

そして二月四日の日記は、一葉日記の中でも特に「雪の日」と題される有名な箇所である。一葉は桃水を訪ねるが、途中で雪が降ってくる。桃水は眠っていて中々起きてこない。一葉は寒い中、一時間ほど待つ。やがて、起きてきた桃水は同人誌の話をし、十五日までに短文を一つ書いてほしいと言う。一葉は私のような者が創刊号に顔を出しては、みなさんの不利益になるのではと案ずるが、桃水は言葉盡くして一葉を説得する。一葉は十一月二十七、二十八日に綴った作品を

見せる。「実はこの頃草しかけし文御めにかけて今日もて参りぬ。完成のものならねどとて持てこし小説一覽に供す」桃水は「よろしかるべし、これ出し給え」と言い、自分は以前話したものを作品にしようと思うと語る。桃水は一葉にしろを作りを、車を呼ぶ。雪の降る中、人力車に乗った一葉は「種々の感情がむねにせまりて」、「雪の日」という小説を思いつく。

二月十二日「小説十五日までに半井うしへ送るべき約なるに期日も近づきぬ。まだ上の巻斗にて中下とも残り。さらば明日の稽古ハ断りひいて休まばやと師君のもとへはがきを出す。此夜小説少し読みて母君に聞かし参らす。思ふこともふまゝにもならで今宵もいたく怠けにけり」、十三日「朝來小説にかゝる。終日従事。此夜終夜。暁がたに少しねむる」、十四日「終日小説ニ従事。燈明に及んで全備す。半井うしへはがきを出す。明午後参らんとて也。重荷おろしたる様になりて今宵はいたく安心す」。

十五日 一葉は中島歌子を訪れるが、歌子は外出するところで帰宅まで待っていてほしいと言われる。二時近くになったが歌子は戻らない。一葉は桃水の住まう「麴町行きに心いそがれて留守居の婢女に依頼して暇乞す」。桃水宅には来客があるようで一葉が軒端に佇んでいると、桃水が兄弟同然の人だから、心配しないで、お入りなさいと声をかける。一葉が「闇桜」の草稿を見せると、いたく褒められる。雑誌の名は「むさしの」となり、男性は一ヶ月交代で執筆するが、一葉は毎月執筆するように言われる。二十二日「午前ハなし得たることもなく午後より著作にかゝる。されども大方は紙と筆にむかひたるまゝとりてかくまでにはいたらざりき」、二十三日「夫より小説原稿にかゝる。此夜も早く床にいたりたり。この日かねて小説の趣向などたてる」。二十四日「朝來昨夜たてし趣向によりて筆をとる」、三月一日「田中君より手紙来る。過日小説の三日棚なし小舟續稿にかゝる」、四日「小説稿いそがし」、六日「再び稿をあらためて郵便に付したり」、

七日「今日ハ半井うし訪はばやとて母君に結髪をわづらはしたり。我が半井うしへ行時として雨天か風かにあらぬは無し」

二月四日に「闇桜」が起草されたと考える菅聡子（二〇〇一）は、明治二十五年二月四日、桃水から「十五日までに短文一篇草し給はずや」と『武蔵野』への寄稿を求められ、直ちに制作に入った、二月十二日の段階で（上）のみが成り、終日机に向かつて、十四日に全篇を脱稿したと記す（菅聡子、前掲書、二頁）。しかし、日記を読むと一葉と桃水のやりとりから「闇桜」はこの日に起草されたのではなく、完成はしていないが、二月四日には桃水に見せる草稿には成っていたと思われる。なお、橋本威は、一葉が桃水に見せようと苦労して書いた原稿は、「闇桜（上）」の前半部ぐらいではないか（橋本威、前掲書、二頁）と推測する。一方、塩田良平は「別れ霜」の心中のところで行き詰まったので桃水に相談に行ったと考えている。（塩田良平、一九六八、三九一頁）

塩田良平は「闇桜」起草について、この時の一葉の気概を重ね、次のように記す。「二月四日より『闇桜』完成の十五日までの十日間は一葉のもっともはりきった時である。この間病中の中島歌子を訪ひ、後事などを托したいと心細げに泣かれるほどの親しさを示されながら、桃水への約束の十五日〆切に間にあはせたいために、小石川稽古を休み、十三日は一日一晩、暁方にちょっとねむり、十四日夕方になって完成した」（塩田良平、前掲書、三三二頁）。二月四日以降の一葉の日記には、一葉が桃水の求めに応じて小説を完成させるべく創作に入ったことが記される。「朝来机辺にあり」（「につ記二」明治二十五年二月十日）、「小説十五日までに半井うしへ送るべき約なるに期日も近づきぬ。まだ上の巻斗にて中下とも残り」（「につ記二」、明治二十五年二月十二日）とある所から、この時期に「上」「中」「下」の構成は決まっていたこと、「上」が完成していたことがわかる。「中」「下」がどこまで書かれていたか、あるいは全くの白紙であったかは日記の記述か

らは知ることができない。

「朝来小説にかゝる。終日従事 此夜終夜 暁がたに少しねむる」（「につ記二」、明治二十五年、二月十三日）。そして、二月十四日「終日小説二従事。灯明に及んで全備す。半井うしへはがきを出す。明午後参らんとて也。重荷おろしたる様になりて今宵はいたく安心す」（「につ記二」明治二十五年二月十四日）。「闇桜」完成である。

翌二月十五日、雨は止んだが風の冷たい日である。中島歌子宅を訪れながら、一葉は「麹町行きに心いそがれ」る。「九段坂上より車に而いたる（中略）小説一覽に供す。いたくほめらる。其人も種々にいふ。雑誌の名ハむさしのとつきたるよし。遅くも来月一日頃までには発兌すべき見込也といふ」（「につ記二」、明治二十五年、二月十五日）一葉の「闇桜」は多いに褒められる。男性は一ヶ月交代で執筆するが、君だけは毎号執筆してほしいと言われる。このように明治二十五年二月十四日に脱稿した「闇桜」執筆にかかった期間は、二月四日起草説では十日間、一月二十七日起草説では約二週間、一月十二日起草説では約一ヶ月、前年の明治二十四年十一月二十四日以前に起草したという説では二ヶ月と三週間ほどということになる。

### 三 一葉の思い

#### 三・一 真といふころ—創作への思い

明治二十四年十一月十日頃「闇桜」を起草する一方で、同年十一月一葉は雑記断章を残している。日付は不明であるが、その「森のした艸」と題された一文に、思うように進まない小説家としての道について記されている。

小説のことに従事し始めて一年にも近くなりぬ。いまだ世に出したるものもなく、我が心ゆくものもなし。親はらからなどの、「な



れは決断の心うとく、跡のみかへり見ればぞ、かく月日ばかり重ぬるなれ。名人上手と呼べるゝ人も初作より世にもはやさるゝべきにはあるまじ。非難せられてこそ、そのあたひも定まるなれ」など、くれぐれ責めらる。「森のした艸」より）

小説を書き始めて一年になるというのに、まだ世に出したのも、自分が納得できるものもない。「一葉が中島の塾を手つだって貰う月二円のほかに、賃仕事や下駄の蟬表の内職をして生計の助けとしないのを一葉の引こみ思案だとせめたてたのだらうけれど、一葉の心とすれば、『衣食のためになすといへども、雨露しのぐ為の業といへど、拙なるもの誰が目にも拙とみゆらん』とかえりみるだけの鑑識はおのずからあった」(宮本百合子、一九三九—一九八六)。しかし、一葉はこうして母や妹に非難されたことを綴った後で、「真といふころ」を作品に込めようという決意を語る。

おのれ思ふにはかなき戯作のよしなしごとなるものから我が筆とるハまことなり衣食の為になすといへども雨路しのぐ為の業といへど拙なるものは誰が目にも拙とみゆらん我れ筆とるといふ名ある上はいかで大方のよの人ごと一たび読ミされば屑籠に投げいらるゝものハ得かくまじ人情浮薄にて今日喜こばるゝもの明日は捨らるゝのよといへども真情に訴へ真情をうつさば一葉の戯著といふともなごかは値のあらざるべき(「森のした艸」より)

一葉が並々ならぬ思いを抱いて創作に向かっていた様子が窺える。「真といふころ」を写すために、人生経験の浅い一葉は自分自身の心を形代にするしか手立てがなかった。このような日記に記された、創作への思いを辿ると、「片恋」は桃水に読ませるためというより、

真情に近づき、真情を描こうと、自分自身の心と格闘した結果ではないだろうか。一人娘という戸主と、相手の淡白な心、そして、一葉は桃水の子と信じていた鶴田民子の子、千代子の名を主人公の少女につける。

「蘭桜」完成後も一葉の創作に対する心の揺れは続いている。明治二五年三月二一日の日記に記された桃水とのやりとりを見てみよう。

家にて相談せしこと、半井うしにもかたる「おのれが小説、到底よに用いられまじきものなれば、つゝみなく断り給てよ。おのれはおのれの心を信ずるが如く、人の仰せられし言を信ずるものなれば、君もし表面のみの賞詞を下し給ふ共、其真偽ををし計るべき智は侍らずかし。君が真意をえしらずして、一向み詞のみを頼み奉らん、我が愚かさばさておきて、君いか計困じ給ふらむ。とても世に用いられまじきものなれば、今より直に心をあらためて、我が身に応ずべきこと目論候はん。只み心のうちを聞かせ給へてよとくり返すに、

一葉は家族に相談したことを桃水にも語る。自分の小説が到底世に認められるようなものでないならばっきりと断ってほしい、自分は人の言葉を信じてしまうので、もし上辺だけの褒め言葉をもらっても、その真偽を計るような知恵は持たない。あなたの真意を知らず、言葉を頼みにしてきたが、自分の愚かさはさておき、あなたはいかばかりお困りでしょう。とても世に出せるものでなければ、直ぐに心を改め、自分に相応しいことを考えるので、ただ心の内を聞かせてほしい

君いたくあきれ顔して、そは又何ぞの事ぞ。おのれ、かひなしといへども男のかたはし也。うけがひ参らせしこと偽りならんや。月々に案じ日々にかうがへて、君が幸福を願ふぞかし。我れはあくまでも相携へて始終せんと思ふを、君はなどさ計にうたがひ給ふ。さり

ながら、これより他に良善の策向あらば、そは止め候はじ。なくは  
今しばしえ給へ。我思ふに、君が著作、此『むさし野』西三回の  
後には、必らず世に名をしられ給はん。さすれば『朝日』にまれ、  
何にまれ、我れ周旋の方法あり。家事の経済などに付て憂ひたまふ  
とあらば、そはともかうも我すべし。『むさし野』初版より二千以  
上の発売あらば、利益の配当あるべきの約なれば、この分のみは我  
れのも合せて君に奉らんの心なり。か計に思ふ心偽ならんや。大方  
は察し給へなどの給へり。

桃水は思いつめた一葉の言葉に呆れたような顔をして答える。いっ  
たい何のことだ。自分は甲斐性がないと言っても男の片割れだ。引き  
受けたことに偽りは無い。日々案じ、考えて、あなたの幸せを願って  
いる。私はあくまでも相携えて行こうと思うのに、あなたはなぜその  
ように疑うのか。しかし、他に良い策があれば、自分は止めない。な  
いのなら、少し耐えてくれ、私はあなたの著作が『むさし野』に載れ  
ば、必ずあなたの名は世に知られるようになる。そうすれば、『朝日』  
にでも、どこにでも周旋できよう。家の経済に憂いがあるなら、こう  
しよう。『むさし野』が二千以上売れば、その利益は私の分も併せ、  
君にさしあげたいと思っている。これは嘘ではない。察してほしい。

『武蔵野』創刊号はこの六日後の三月二十七日に刊行された。雑誌  
は第二号、第三号まで出されたが、いずれも予定より遅れて刊行され、  
売れ行きも悪く、三号で終刊となった。しかし、「必らず世に名をし  
られ給はん」という一葉の才能の開花は桃水の予測をはるかに超える  
ものであったと言えよう。

このようにして一葉の「闇桜」は『武蔵野』に掲載され、世に出る。  
一葉日記からは一葉が「闇桜」執筆にあたって持てるものをすべて投  
入し、渾身の思いで作品を書き上げたことが伝わってくる。そして、  
「真といふころ」を作品に込めようと、様々に思い悩みながら、自

身の思いを鏡に映すかのように一葉は「片恋」を主題として文机に向  
かい、作品をしあげる。「闇桜」である。「闇桜」は、「一葉の桃水に  
対する、聞かせ言葉」（和田芳恵、一九七二）であったとも評される  
が、本稿では、一葉が「真といふころ」をどのように作品に込めよ  
うか、苦慮した結果、恋愛経験の少なさを補うために自分自身を題材  
とすることになったのではないかと考える。さらに、そうした一葉の  
「片恋」への思いを日記から探してみたい。

### 三・二 桃水への思い

「闇桜」は忍ぶ恋のために衰弱し死に向かう少女を題材とし、あま  
りにも非現実であると評されることが多い。しかし、桃水への思いを  
秘めたまま、短い生を終えた一葉の生涯と重ね合わせると、一葉の生  
に最も近いのは、はからずもこの「闇桜」の千代の物語であった。

一葉は日記に、日々の出来事に加え、桃水に対する思いを書き留め  
ている。一葉日記からそれを拾ってみよう。

一葉が野宮菊子に紹介されて、初めて桃水に出会ったのは、明治二  
十四年四月一五日、一葉十九才、桃水三十二才。桃水は妻に先立たれ、  
独身で、東京朝日新聞の記者であった。「初見の挨拶などねんごろに  
し給ふ。おのれまだかゝることならばねば、耳はてり唇かわきて、い  
ふべき言もおぼへずのおべき詞もなく、ひたぶるに礼をなすのみ成  
き。よそめいか計おこなりけんと思ふもはづかし。」一葉は丁寧な接  
拶をするが、こういうことには慣れないため、緊張で耳がぼてり、唇  
はかわき、言葉もうまく出ず、ただお辞儀をするだけ。よそ目にはど  
んなふうに見えるかと思うのも恥ずかしい。

桃水は三十才ぐらいだろうか。姿形を取り立てて書くのは大変失礼  
なことだと思ふが、「我が思ふ所のまゝをかくになん。色いと白くこそ  
ておだやかに少し笑み給へるさま、誠に三才の童子もなつくべくこそ  
覚ゆれ。丈は世の人にすぐれて高く、肉豊かにこえ給へば、まこと

に見上げる様になん」。人柄も穏やかで、背が高く美形の桃水は女性を引きつける魅力的な人物だったと言う。桃水は、当代の小説について語りだす。自分が良いと思うものは世の人に好まれない。「日本の読者の眼の幼ちなる、新聞の小説といわば有ふれたる奸臣賊子の伝、或は奸婦いん女の事跡の事をつゞらざれば、世にうれざるをいかにせん」。続けて桃水は自分が小説を書くのは「名譽の為著作するにあらず、弟妹父母に衣食させんが故也」と言う。一葉はこの後、いかに生活費を得るかに悩むことになる。桃水は「君が小説をかゝんといふ事訳、野々宮君よりよく聞及び侍りぬ。さこそはくるしくもおはすらめど、しばしのほどにこそ、忍び給ひぬ。」と一葉を励ます。「我れ師といはれん能はあらねど、談合の相手にはいつにても成なん。遠慮なく来給へ」。桃水の謙虚で誠実な言葉や態度は一葉の心を打つ。「いとねんごろに聞え給ふことの限りなく嬉しきにも、まづ涙こぼれぬ」。

四月二十二日、早速一葉は桃水を訪れ、「和文めかしき所は少し俗調に」と教えを受ける。一葉は前夜書いた小説の添削を頼み早く帰る。「人一度みてよき人も二度めにはさらぬもあり。うしは先の日見え参らせたるより、今日は又親しさまさりて『世に有難き人哉』とは思ひ寄ぬ」。ここにはひね者の一葉はいない。

四月二十五日、雨が降る。一葉は早朝から萩の舎に歌の稽古に出かける。一葉のこの日のでき事を象徴するかのように、昼頃より、空が晴れわたり、日が花やかにさす。「今日は何となく物の手につかぬ様に覚ゆるは、何故(なにゆゑ)成しや、おのれもしらず。」夜、桃水より文が来る。小説のことについていろいろ話したく、また先日約束した「即真居士への紹介をもなすべければ、さばる事なからんには、明日午前より神田の表神保町俵とかやいへる下宿までようこよ」。母上に計ると「行きなさい」とおっしゃる。「今宵は、何となくむね打ふたがりて、ねぶるべき心地もせざりき」。胸がいっぱいで眠れそうになり。作品では、老獪な語り手として振舞う一葉だが、日記からは一九

才の少女の胸のときめきが伝わってくる。

次の朝、起きてみると、空は黒い雲で覆われている。「今日は雨にこそ」とがっかりしていると、母君は降りそうなので、行かなくても良いのではとおっしゃる。けれども、「私の用なるを、空しくまたせ参らせん」ことはできない、強い雨でもそれは仕方がない、必ず行かなくてはと支度している内に、雲の切れ間が見え始めた。「うれしくて家をば出ぬ。田町といふほとりより、又くろき雲おびただしく出来て、雨俄(にわか)に盆をかへす様に成ぬ」。今更帰るより、同じことなら志す方へ行こうと車に乗り、桃水の言う下宿屋の方へ行く。

まだ下宿に人を訪ねたことのない一葉は、声をかけるのにも「何となく心おくして入もえかねたれど、はつべきならねば、ねんじて、半井うしやおはすといひ入たり」。桃水は二階の座敷で、手紙を書いていゝ日だったので、今日の雨に思い至らず文を差しあげたのは、紹介するはずだった小宮山君も俄な頭痛で、早朝に鎌倉へ発つたそうだと大変気の毒そうに語られる。「小説の事につきてもねんごろに聞えしらせ給ひて、此次ぎはかか、るもの書み給へ。おのれかねてよりかかんの心組み有しかども、暇を得ずして日頃過ぬとて、かくかくしてかくせばをかしからんなど物語り給ふ」。桃水は一葉に小説の趣向の案を授ける。しかし、桃水は「それより先に今日はまづ君に聞え置度事ありてとの給ふ」。「余や、いまだ老果たる男子にもあらず、君はた妙齡の女子なるを、交際の工合甚だ都合よろしからずと君真に迷惑氣にの給ふ」。一葉もかねてから思っていたことで「おもて火の様に成ておのが手の置場もなく、只恥がはしきをもておほはれたり」。桃水は、そこで一計を考えたと続ける。「余は君を目して我が旧来の親友同輩の青年とみなして万の談合をもなすべければ、君は又余をみるに青年の男子也とせで、同じ友がきの女子と見給ひて隔てなく思ふ事の給ひねと聞え給ひて打笑みたり」。一葉はこの時の言葉を忘れず、桃水を

兄君と呼び、また自分を男子の同輩と思おうと自分に言い聞かせる。さらに、桃水は「また私で出来ることはできる限りしてさしあげよう」と言い、自分の貧しさを包み隠さず一葉に話して聴かせる。一葉は様々にものを思う。「師がの給ふ所をきけば、吾が家のまづしきは未だまづしとすべきにあらず、君の経来（へきた）り給ひけんこそ中々にまさり給へれ、とぞ覚ゆる」。桃水の経験を聞くと、自分の生活は貧しいうちに入らないと思える。桃水のできる限りの手助けをしようという励ましの言葉は、一葉を少なからず勇気づけたであろう。

五月八日、教えを乞おうと桃水を訪ねる。桃水は小説のことについていろいろ物語り、丁寧（ていねい）に教えてくれる。今日こそ、小宮山君に紹介しようと言われ、一葉は小宮山に会う。桃水は一葉のために車を呼んでくれる。十二日、桃水より文が来る。転居の知らせと訪ねてくるようにという伝言であった。一葉はすぐに十五日に参りますと返事を書く。四月十五日に桃水に紹介されて、一ヶ月の時が経っている。十五日、桃水宅に赴く。知り合いが大阪の書肆で雑誌を出すので、小説を書く人を世話してくれというから、君（一葉）のことを話したが、あいにく「露国太子殿下の急変」で用事が出来、今朝帰阪した君の来訪は断ろうと思ったが、間に合わないのですそのままにしたという話であった。二十七日、約束した小説が完成する。

一方の桃水も一葉の手になる「闇桜」の草稿を生涯愛蔵していた。塩田良平は桃水が一葉の字を好んだためとしている。「桃水が感情ぬきで一葉の字を愛したのは事実で、処女作『闇桜』の草稿を死ぬまで愛蔵してゐたのも、その書体を愛したので、自著『胡沙吹く風』に一葉の歌を乞うたが、これも一葉自筆をそのまま版刷にしてゐることもわかる」（塩田良平、一九六八、三三六頁）。また、塩田良一は、桃水が一葉の書く女性の言葉が荒っぽいので、一葉に話して聞かせたことを紹介している。「處夫からは女の言葉に始終意を用ひられて、是では何か彼では何かと絶えず相談されました（『一葉女史』、『中央

公論』昭和四十年六月)。(塩田良一、一九六八、三三六頁)

ほどなくして一葉は親友の伊東夏子をはじめとする周囲の人々の諫めにより、明治二十五年六月二十二日「我、君のもとに参り通ふ限りは人の口ふさぐこと難か、るべし。依りて今しばしのほどは御目にもかゝらじ、御声も聞じとぞおもふ。其こと申さんとて也」と桃水に絶交を伝え、桃水の下から離れる。

翌明治二十六年二月七日の一葉日記には「一日机に寄くらして、日没より摩利支天に参詣」するとある。摩利支天の賑わいを描き、一葉は「文明開化か、百鬼夜行か。筆こゝろにしたがはゞ、材料は山ともいふべし」と記す。そして、夜「我が桃水師」の小説に目を通す。

「今日は議會開会の日也。模様いかに」など人々いふめる。帰路、切通し坂のあたり、けしきいふべくもあらず。何よりも高きは号外売る新聞売子の声、さてはそこそこの辻にたちて壮士とかいふ様な人の、今の世のさまを文につくりて、「鉄石心」とか、あやしきふしつけてうたふらんよ。郵便局の燈かゞやきて、脚夫の行来をるよりしげく、電話交換処のいそがはしげなる。警察に出入る人の二重廻し深々とゑりを立てしは探偵と覚しく、金ぼたん、角帽子の二人三人づれに立入る寄席は女義太夫也。身なり、いでたち計は何方の姫、奥方かと覚ゆる人の、夫にはあるまじき人に手を取られて、をかしげにものごと行ことばを聞けば、みそこしきさげて豆腐屋にはしるそれめきたり。文明開化か、百鬼夜行か。筆こゝろにしたがはゞ、材料は山ともいふべし。(略) 此夜『朝日新聞』の小説五十回計のものよむ。我が桃水師のもありけり。「雪だる摩」とてたんでい小説なりき。十二時計床に入りき。

そして、明治二十六年二月二十三日。日が暮れて一葉宅を訪れたのは「胡沙吹く風（上・下）」を携えた桃水の姿であった。「胸はただ大

波のうつらん様に成て」「明ぬれと暮ぬれと嬉しきにも悲しきにも露わすれたるひまなく夢うつつ身をはなれぬ人」、せめて文だけでもと立ちつくしたことも一度や二度でない。しかし、一葉は冷静に書く。

「桃水うし文章粗にして華麗と幽棲とをかき給へり、又ミつからも文に勉むる所なくひたすら趣向意匠をのミ尊ひ給ふと見えたり」。これ以上に、友人の田中ミの子女史は手厳しく批判するが、一葉は「只涙こほれにこほれぬ」。これは作中人物の動きによるものではなく、「我心の奥にあやつるものあれはなるへし」。自分が桃水の物語に感動できるのは、桃水の筆の力ではなく、自分自身の心の奥に自分を操るものがあるからだと冷静に分析する。

自分自身の心の奥にあるものを「厭う恋」とした文として、よく知られているのが、明治二十六年七月五日の「につ記」に添える書かれた「戀ハ」とする雑記である。

まこと入立ぬる戀の奥に何物かあるべき。もしありといはゞみくるしくにくうくつらく浅ましくかなしくさひしぐ恨めしく取つめていはんにハ厭ハしきものよりほかあらんとも覚えず。あはれ其厭ふ恋こそ恋の奥成けれ。(明治二十六年七月五日「戀ハ」)

また、明治二十一年四月詠草 19 「恋百首」で二葉は 51 「片恋」と題して歌を詠んでいる。「かく斗思ふとだにも人しらば、しなんいのちのかひは有矣」。また、野口碩(一九九六)は明治二十五年十月詠草 32-19 に「片おもひする人に」と題して「恋といふこひは心にあるらんをゆめつれなしと思ふなよ君」の歌を挙げ、「恋とは我心に映出し花のおのづからうるはしくたのしく清らげきもの」であって、自分と相手が存在するのではなく、心が映し出したものであり、「つれなき人に身をかこちしのぶ思ひに世をうらむ」のは自分が本来「一ひらの色も香もない」ものを映し出した「もとの形」を考えないからだ、

という認識を反映したものである。

野口碩(前掲書)は『闇桜』における苦悩する千代とそれを知らない全く透明な良之助との対照的な内面状態」こそは、後日の個性的な精神感覚への萌芽であると記す。

#### 四 おわりに

本稿では、一葉日記の記述から、処女作「闇桜」を読み解いてきた。一葉は試金石ともされる「闇桜」に自らの生活者としての真実、桃水に対する「片恋」を作品に込めたが、物語の語りや、物語で交わされる言語行為から物語を見ると、「闇桜」には一葉作品の本質が凝縮されていることがわかる。

さらに「闇桜」に込めた一葉の思いをさぐるには、物語の言説自体の分析が必要であろう。その研究方法の一つとして、物語論から語り手の視点やモティーフ、そして作中人物の言語行為という分析視点を選び、「闇桜」とそれ以降の作品との類似点を探っていく方向が考えられる。これは別稿に譲りたい。

#### △参考文献▽

- 愛知峰子(二〇〇三)「一葉・恋歌から恋愛小説へ―初期作品群―」『国文学解釈と鑑賞第六八巻五号』六三―六九頁
- 青木一男(二〇〇二)「八論考」『闇桜』覚書『城西文学(二六)』二―三九頁
- 石井文恵(一九九七)「樋口一葉『闇桜』論―千代の恋愛をめぐって」『文研論集』三〇号
- 菅聡子(二〇〇一)、関礼子(二〇〇一)『新日本古典文学大系『樋口一葉集』校注、岩波書店
- 塩田良平(一九五二)「二葉に与へた桃水の文学的影響―闇桜初稿本を通じて」

『国語と国文学 二九三』一一二頁

塩田良平（一九六八）『樋口一葉研究』中央公論社

鈴木三雄（一九六四）『闇桜』の発想と近代性』『立正大学国語国文（四）』

関良一（一九七〇）『樋口一葉 考証と試論』有精堂出版

滝藤満義（一九九六）『一葉初期小説論』『闇桜』から『暁月夜』まで』『千

葉大学人文研究』人文学部紀要（二五）二二七—二四九頁

田貝和子（二〇〇二）『樋口一葉』『闇桜』の文体について』『東洋大学大学院

紀要（三九）四九—六四頁

趙曉晨（二〇一〇）『樋口一葉初期作品に描かれた女性像』『闇桜』から『や

み夜』までを中心に』『語文と教育の研究（一一）』一四—二六頁

塚本章子（一九九九）『樋口一葉』『闇桜』考—同時代の『恋愛』をめぐる言説

の中で』『国文学攷一六二号』二七—三八頁

野口碩（一九九〇）『誇張された『片恋』—『闇桜』研究ノート』樋口一葉研

究会編『論集樋口一葉』おうふう、五—二二頁

橋本威（一九八六）『一葉』『闇桜』論のために—主に『桃水の添削』問題』

『近代文学試論二四』一一—三頁

橋本威（一九八七）『統・一葉』『闇桜』論のために—内容に関して』『国語国

文学（二二）』梅花女子大学文学部、六五—八四頁

橋本のぞみ（二〇一一）『樋口一葉 初期小説の展開』翰林書房

松坂俊夫（一九七〇）『樋口一葉研究』教育出版センター

細谷朋代（二〇〇五）『『闇桜』試論—疎外される男たち』『明治大学大学院

文学研究論集二三号』一六一—一七三頁

満谷マーガレット（一九九四）『八狂気』と青春不在—『闇桜』を中心に』

『國文學解釈と教材の研究三九卷一—号』七四—八一頁

宮本百合子（一九三九—一九八六）『婦人と文学』『宮本百合子全集第十二巻』

新日本出版

屋木瑞穂（二〇〇〇）『樋口一葉』『闇桜』の位相—△筒井筒△変奏』『近代文

学試論三八号』一一二頁

山田有策（一九九四）

山根賢吉（一九六八）『一葉初期小説覚え書（一）—『闇桜』『たま櫛』をめぐって』『学大国文』一二号、五六—六〇頁

和田芳恵（一九五〇）『一葉の日記』筑摩書房

和田芳恵（一九七〇）『日本近代文学大系 8 樋口一葉集』補注、角川書店  
和田芳恵（一九七〇）『樋口一葉』講談社現代新書

△資料▽

『樋口一葉集』（一九七〇）角川書店

『樋口一葉集』（二〇〇二）岩波書店

『樋口一葉全集第一巻』（一九七〇）筑摩書房

『樋口一葉全集第二巻』（一九七〇）筑摩書房

『樋口一葉全集第三巻（上）』（一九七〇）筑摩書房